

新潟を離れ、日本を離れ、気がついたらオーストラリアの先住民アボリジニの人々と暮らしていた。砂漠で干上がり、洪水でおぼれ、数々の狩りや儀式に参加するなかで、アボリジニ

文化の深遠さを学んでゆく。そして広大な灼熱の大地で、ふと故郷新潟を思う。退屈な日常生活に飽き足りない人におくるオーストラリア発の紙つぶて。

新潟で生まれ育った。子供は一心不乱に遊んでいた。好きなところは、僕は魚釣りが大好きだった。せせこましい住居や学校や街並みと違って、浜辺や堤防のむこう側には海が水平線のかなたまで広がっていた。まだ小学生だった僕は、魚どの駆け引きといった釣りの醍醐味より、むしろ海を前にして

「本当にやりたいことだけをする」—そう自分に言い聞かせていた。新潟を飛び出したくて東京の大学に進学。しばらくして、今度は日本にいたくなくなつてオーストラリアに渡った。気がつくくと、オーストラ

生命 あふれる 大地 アボリジニの世界

保莉実

□1□

世界の広さを、そして自由の何たるかを体で感じていたのだと思う。もちろん海での遊びには危険がつきものだった。消波ブロックで何度も足を滑らせた。防波堤から落ちそうになったこともある。まだ受験や仕事の心配などしないで済んだ子供のころ、この自由で危険な海で、僕

シドニーから、オーストラリア大陸中北部にある滞在予定のアボリジニ村落まで、片道八千キロを下らない。砂漠の道をバイクでひたす

膨大な時間

日常に潜む自由と危険

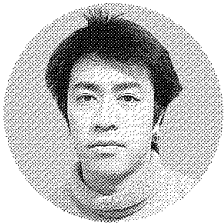
ら走り続けた。セ氏四〇度近い灼熱の日が続く。人に出会うことはほとんどない。どこを見回しても真平らな大地にただ一人立つと、世界の大部分が空であることに気づかされる。大地は少年時代に経験した、あの自由で危険な感覚がよみがえってくる。中学・高校・大学と人並みに「世間」とつきあわざるをえなかった僕には、こうした開かれた場所に身を置きなおすことが絶対に必要だった。そして、これは僕に限らないのではな



バイクで砂漠をひた走る筆者

いかに思う。この荒涼とした大地に、アボリジニの人々は狩猟採集生活をしてきた。彼らは、世界でもっとも水の乏しいオーストラリア大陸を「生命あふれる豊穡な大地」と教えてくれる。土地を熟知し、神話をリアルに生きるアボリジニにとって、そこは文字通り豊かな大地なのだ。圧倒的に過酷としか思えない環境のなかで、アボリジニの人々は、何万年ものあいだたいした労働もせず（おそらくは労働という発想すらなく）、さっさと食物を確保した後は、儀式や交流をつうじて豊穡な精神世界を培ってきた。広大な大地がもたらす自由と危険を、あたりまえの日常として生きてきた人々。巨大建造物も弓矢も車輪もつくりださなかったオーストラリア先住民は、五万年以上という膨大な時間をかけて、「文明」とは異なる何かを築きあげてきたはずだ。僕は、その「何か」に関心をもっている。

ほかり・みのある 1
971年新潟市生まれ。



一橋大学卒業後、訪蒙。2001年オーストラリア国立大学で歴史学科博士号を取得。歴史学者。現在、日本学術振興会特別研究員。翻訳書にデボラ・B・ロイス「生命の大地」。

人々は狩猟採集生活をしてきた。彼らは、世界でもっとも水の乏しいオーストラリア大陸を「生命あふれる豊穡な大地」と教えてくれる。土地を熟知し、神話をリアルに生きるアボリジニにとって、そこは文字通り豊かな大地なのだ。圧倒的に過酷としか思えない環境のなかで、アボリジニの人々は、何万年ものあいだたいした労働もせず（おそらくは労働という発想すらなく）、さっさと食物を確保した後は、儀式や交流をつうじて豊穡な精神世界を培ってきた。広大な大地がもたらす自由と危険を、あたりまえの日常として生きてきた人々。巨大建造物も弓矢も車輪もつくりださなかったオーストラリア先住民は、五万年以上という膨大な時間をかけて、「文明」とは異なる何かを築きあげてきたはずだ。僕は、その「何か」に関心をもっている。

閉塞感ただよふ現代の時代状況ではあるが、アボリジニもまた二十一世紀の始まりを僕らと共有している。なんと喜ばしいことだろう。「人生なるようにしか、ならない」などと言った、シニカルになっている暇などないのだ。僕はオーストラリアでの体験を通じて、自由で危険な広がりのおかげで一心不乱に遊びぬく術を学び知りたいと思っている。(歴史学者)

(火曜日掲載)